

茶の湯の楽しみ

京都文教高等学校2年（京都府）

森安 烈

高校2年になり、授業で茶道を行うのも2年目となった。茶室に入れば、すっかり見慣れた木の造りと、上品なお茶や木の香りが漂っている。もう何度も茶道の授業を受けてきたが、この茶室に入った時の空気感は、普通に教室に入る時とは違う新鮮さを感じる。毎日変わるお花や花入に目をやると、今日も季節を感じられる美しい花が生けてあり、その横の掛軸には、「和敬清寂」や「茶身修身」といった言葉が力強く筆で書かれている。

僕は、高校1年の時は正直、茶道があまり好きではなかった。日本の古き良き文化のすごさは分かるが、お茶の苦みやお点前などはあまり好きではなかった。そんな茶道だったが、僕が唯一毎日楽しみにしていた物があった。それは、お菓子である。といっても、おいしいからとかではなく、季節を感じる見た目や食感、もちろん味もそうなのだが、どこから見ても美しく、いつからか毎回の楽しみとなっていた。こうしてお菓子を楽しみにしているうちに、だんだんと茶道自体が楽しみになり、お花は毎回季節を感じる事ができ、お茶碗の柄を見ることも楽しみとなっていった。また、お茶は飲んでいくうちに苦みにも慣れ、味の奥深さを感じられるようになった。

そして高校2年の今、僕はさらに茶道への楽しみを広げ、自然と心が落ち着くあの空間が今では楽しみであり、それが僕にとっての茶道の楽しさだと感じている。人それぞれ、茶道をすることへの意味や心得があると思うが、僕の中での茶道をすることの意味は、毎回新たな楽しみを見つけることにある。それはお花か、お菓子か、お茶かは実際に茶道をするまで分からないかもしれない。しかし、こうして季節を感じたり、心を落ち着けてお茶を味わったりすることで新たな魅力に気付くことができると共に、茶の湯の本来の心のあり方を身に付けることができる僕は思っている。まだまだ茶道をする機会はたくさんあるが、「一期一会」という言葉のように、毎回新たな茶道の楽しさに出会えることを楽しみにして、今後も学校生活の中で茶道を充実させていきたい。